様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月　3 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２３１０１０６
研究課題名（和文）中山間地における孤立集落の事前復興に関する災害復興学的研究

研究課題名（英文）Academic research on disaster recovery in isolated villages in hilly and mountainous areas　involving pre-disaster risk reduction

研究代表者
山　泰幸　　（YAMA　YOSHIYUKI）
関西学院大学・人間福祉学部・教授
研究者番号：30388722

研究成果の概要（和文）：日本の国土の７割を占める中山間地では、多くの集落で、高齢化と人口減少が急速に進んでいる。また、それらの集落の多くは災害時には孤立化する恐れがある。集落のコミュニティ力を高め、被災後の復興プロセスをも視野に入れた事前復興の取り組みが必要である。本研究では、社会科学諸分野の研究者が領域横断的に、中山間地の集落の事前復興に資する条件を探ることを試みた。特に、集落を運営するうえでの伝統的な知恵や工夫を再発掘・再利用することでコミュニティ力の再生の手掛かりを探ることを試みた。
研究成果の概要（英文）：Seventy percent of the land mass of Japan is designated "hilly and mountainous areas." Many of the small villages in these areas are rapidly aging and becoming depopulated. Also, many of the villages have a high risk of becoming isolated in the event of a natural disaster. Measures to build up community strength in these villages must be taken before any disaster occurs with a view toward facilitating the post-disaster recovery process. This study takes a multifaceted approach that includes factors from ethnology, sociology, finance, architecture, and other fields. This comprehensive approach is directed at discovering useful criteria for reducing risk prior to a disaster occurring in the villages in hilly and mountainous areas. In particular, we sought to rediscover and use traditional wisdom and devices employed in the running of the villages, called "folk mechanisms ," as a way to rebuild community strength.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2011 年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2012 年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
年度			
年度			
総　計	12,800,000	3,840,000	16,640,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：社会・安全システム科学、社会システム工学・安全システム
キーワード：中山間地、孤立集落、事前復興、民俗的仕掛け、災害復興

１．研究開始当初の背景

成熟社会を迎える我が国では、戦後の成長社会における災害対策とは異なる方策が求められている。とりわけ 1995 年 1 月 17 日に発災した阪神・淡路大震災後は、「災害を完全に防ぐことは困難であるが、被害を出来るだけ軽減することは可能である」という「減災」の思想や、「新たな公」としてのボランティアやＮＰＯの登場により、成熟社会における災害対策についての議論が盛んに行わ

れるようになってきている。

特に、本研究にとって重要な学術的背景は、連携研究者の山中が指摘しているように、被災後の復興プロセスがスムーズに進んだケースは、被災前のコミュニティがすでに積極的に活性化の取り組みを行っている場合であることが明らかになっている点である。つまり、災害復興を成功裏に進めるためには、被災前からあらかじめ復興プロセスを開始させる「事前復興」の取り組みが有効である。

阪神・淡路大震災後に起きた主な災害をふりかえってみると、2000 年の鳥取県西部地震、2004 年の新潟県中越地震、2007 年の石川県能登半島地震、2008 年岩手・宮城内陸地震と、いずれも中山間地域における災害が目立っている。さらに、近い将来に発災が予測されている東南海地震における被災地の多くが、中山間地域の集落であることが予測されている。なぜなら、国土の 7 割以上を中山間地域が占めているだけでなく、災害に対する耐性が脆弱であるからである。それゆえ、中山間地域の「事前復興」は、急務の課題となっている。

２．研究の目的

現在、中山間地域では、人口の過半数を 65 歳以上の高齢者が占める「限界集落」が急増し、維持困難な状態となっている。とりわけ、来る東南海地震では、生活道路・通信手段が寸断され、限界集落の多くが「孤立集落」となると予想されている。この深刻な問題に対していかに対応すべきか。本研究はこの点について、研究代表者が調査してきた、伝統的な村落共同体が自らを守るために伝承してきた「民俗的な仕掛け」を発掘し、社会学、社会心理学、社会福祉学、財政学など、広く社会科学諸分野の研究者が領域横断的に、これを再利用する方法を開発する。具体的には、中越地震の災害復興経験を共通の出発点として、「災害に強いコミュニティ」に関する社会科学的モデルを構築し、中山間地域の「事前復興」に対する実践的働きかけに結びつけようとするのが本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究は、広く社会科学を基盤とした研究者らによって領域横断的に研究を進める試みである。近年の災害研究では、自然科学の視点に立った研究が数多くなされる一方で、社会科学的な知見からも災害を研究することの重要性が叫ばれている。社会科学分野における災害についてのハンドブック等も発刊され、ますますその重要性は増している。しかし、その多くは、法学、政治学、社会学、組織科学、経済学、民俗学とそれぞれの個別分野に限られたものが多い。例えば、研究代表者の山は、災害復興には、地域の人々の心の拠り所となる、社会・文化的シンボルの復興が肝要であることを、「象徴的復興」という概念で提示している。象徴的復興の視点から言えば、社会・文化的シンボルが豊富かつ力を持っている地域は頑健といえるが、しかし、財政学な立場から見て、象徴的復興を支援できないとすれば、その地域は脆弱ということになる。このように、多角的な立場から包括的に鑑みなければ、災害対策は不十分なものにならざるを得ないのである。そのため、本研究では複数の研究者らが同一フィールドについて総合的に分析する方法を着想するにいたった。

４．研究成果

平成 22 年度は、事前復興の条件をコミュニティの伝承や記憶、災害時に実際にそれが活かされた経験などを調査・再利用するための理論の輪郭とその方向を明らかにするために、西宮と東京で研究会を数回実施した。また、上記の方向性を明らかにするために、宮城、島根、鳥取、徳島にて現地調査を実施した。特に、徳島県三好郡東みよし町を、数次にわたって調査した。コミュニティがうまく維持・再生産が行われていた時代の記憶や、コミュニティの地理的条件や自治会組織など調査した。特に、農村舞台の復活公演により集めた客を被災時のサポーターへとつなぐ試みや、消防団員の確保のルートとして地元の無形民俗文化財の保存会を活用するなど、独自の工夫や取り組みが明らかになった点は大きな成果である。

平成 23 年度は、前年度に引き続き、西宮で研究会を数回実施した。特に前年度の成果を踏まえて、県市町村の防災担当者から、自主防災組織の現状と課題に関して報告をしてもらい検討した。島根、鳥取、香川などの自治体である。また、上記の方向性を明らかにするために、島根、鳥取、徳島を中心に現地調査を実施した。また、徳島県三好郡東みよし町を数次にわたって調査した。特に、地域力向上の調査に関して、まちづくりに取り組む、行政および住民団体と協力関係が築かれたことが大きな成果である。

平成 24 年度は、前年度に引き続き、鳥取、島根、徳島を中心に調査を実施した。また、研究会を数回実施した。そのうち、関西学院大学と韓国高麗大学校との国際学術フォーラムも含まれている。また、中山間地の事前復興の担い手として自主防災組織に着目し調査を行った。中国四国地域の行政担当者から管轄地域の自主防災組織の現状について情報を収集した。また、中山間地の買い物弱者対策に関しても調査を実施した。また、中山間地の事前復興の資する取り組みとして、グリーンツーリズム、農家民泊についても取り上げた。

その他、研究期間を通じて、中山間地と共通する条件にある離島や、隣国韓国の中山間地のまちづくりについても調査を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 14 件）
1. 山泰幸, 中山間地における孤立集落の事前復興の取り組み―徳島県西部の事例から, 災害復興研究, 5 号, 2013, 11-14, 査読無
2. 浅井秀子・熊谷昌彦：鳥取県における東日本大震災による長期避難者を対象とした意識調査, 日本建築学会, 技術報告集第 18 巻第 40 号, pp. 1039-1042, 2012. 10, 査読有
3. 石田和之, 固定資産評価の簡素化と広域化・共同化～家屋評価を中心に～, 資産評価情報, 2012. 07, 通巻 189 号, 2-9, 財団法人資産評価システム研究センター, 査読無
4. 田並尚恵「東日本大震災における県外避難者への支援－受入れ自治体調査結果から」関西学院大学災害復興制度研究所『災害復興研究』4 号, 2012. 06, 15-24, 査読無
5. 田並尚恵, 県外避難者への支援とその課題, 公益財団法人ひょうご震災記念 21 世紀支援機構『2 世紀ひょうご』12 号, 2012. 03, 36-43, 査読無
6. 船戸修一・武田俊輔・祐成保志・矢野晋吾・市田知子・山泰幸, テレビの中の農業・農村：NHK『明るい農村(村の記録)』を事例として, 村落社会研究ジャーナル, 37 号, 2012, 93-99, 査読有
7. 石田和之「地方税の震災をめぐる動き」『法律のひろば』3 月号（第 65 巻第 3 号）2012, 43-51, ぎょうせい, 査読無
8. 山泰幸, 「象徴的復興」とは何か, 日本研究, 18 号, 2012, 63-102, 査読無
9. 山泰幸, 島根県隠岐の島町の世界ジオパーク認定を目指すまちづくりの取り組み, 人と自然, No. 2, 人間文化研究機構, 2011. 11, 28-29, 査読無
10. 田並尚恵, 域外避難者に対する情報提供－三宅島噴火災害の避難者調査を中心に, 災害復興研究, 3 号, 2011. 05, 167-175, 査読無
11. 石田和之「大規模災害の発生時における固定資産税の特例」『税』5 月号, 206-229, 2011, 査読無
12. 山泰幸, 鳥越皓之, 民話と生きものの住まうまちづくり--環境民俗学からのアプローチ, ビオシティ, 46 号, 30-39, 2010. 10, 査読無
13. 山泰幸, 千年の大クスに学べ--徳島県東みよし町まちづくりプロジェクト, ビオシティ, 45 号, 120-125, 2010, 08, 査読無
14. 山泰幸, 民話に学ぶ環境民俗学―人と自然の物語, ビオシティ, 44 号, 82-87, 2010. 06, 査読無

〔学会発表〕（計 13 件）
3. 山泰幸, 震災と日本人論―和辻哲郎をめぐって, 高麗大学校日本研究センター国際学術大会（招待講演）, 2013. 3. 9, 高麗大学校（韓国）
2. 浅井秀子・熊谷昌彦：平成 21 年台風第 9 号における被災実態と住宅再建に関する居住者意識－兵庫県佐用町の事例－, 日本建築学会中国支部研究報告集第 36 巻, pp165-166, 2013. 3. 3, 岡山理科大学
3. 船戸修一, グリーン・ツーリズムにおける“まなざし”の交錯：X町の「農家民泊（農泊）」の取り組みから, 国際日本文化研究センター共同研究会, 2013. 02. 16, 国際日本文化研究センター
4. 山泰幸, 文化遺産を活用した地域再生―日本の事例から, 韓国大田市立歴史博物館セミナー（招待講演）, 2012. 11. 25, 大田市立先史博物館（韓国）
5. 山泰幸, 日本における文化研究の動向と争点―社会的観点から, 韓国文化研究学会（招待講演）2012. 11. 24, 聖公会大学校（韓国）
6. 山泰幸, 韓国から見た東日本大震災―ドキュメンタリー番組を中心にして, 高麗大学校日本研究センター国際学術大会, 2012. 09. 18 高麗大学校（韓国）
7. 山中茂樹, 評論「創造的復興」, 高麗大学校日本研究センター, 2012. 09. 18, 高麗大学校（韓国）
8. 浅井秀子・河裾友孝・大浦文弘：鳥取県における買い物弱者対策に関する取り組み, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2, pp163-164, 2012. 9. 14, 名古屋大学
9. 河裾友孝・浅井秀子・大浦文弘：鳥取県江府町における移動販売利用者の意識調査, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2, pp165-166, 2012. 9. 14, 名古屋大学
10. 大浦文弘・浅井秀子・河裾友孝：長崎県対馬市の地域マネージャー制度からみる離島定住に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集E-2, pp147-148, 2012. 9. 14, 名古屋大学
11. 山泰幸, 文化遺産を活かした魅力あるまちづくり, 扶余郡文化財保存センターシンポジウム（招待講演）, 2012. 06. 12, 扶余ロッテリゾート（韓国）
12. 浅井秀子・熊谷昌彦：鳥取県内の東日本大震災による長期避難者を対象とした意識調査, 日本建築学会シンポジウム「東日本大震災からの教訓、これからの新しい国つくり」, pp555-558, 2012. 3. 2, 日本建築学会館
13. 浅井秀子・熊谷昌彦：中山間地域の冬期居住における住まい方に関する基礎的研究－島根県邑南町羽須美地区の事例－日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2, pp407-408, 2011. 8. 24, 早稲田大学

〔図書〕（計 6 件）
1. 関西学院大学災害復興制度研究所・高麗大

学校日本研究センター共編,山泰幸,山中茂樹分担執筆,『東日本大震災と日本―韓国からみた 3.11』,2013,関西学院大学出版会,275ページ(山中,1-16)(山,258-259)
2.鳥越皓之編,山泰幸分担執筆,環境の日本史 5 自然利用と破壊―近現代と民俗―,2013,吉川弘文館 308ページ(227-246)
3.山泰幸他編『現代文化のフィールドワーク入門』2012.01 ミネルヴァ書房 278ページ
4.西城戸誠・船戸修一編『環境と社会』,2012,人文書院,220ページ
5.山中茂樹『漂流被災者～「人間復興」のための提言』河出書房　2011,171ページ
6.山中茂樹,いま考えたい　災害からの暮らし再生,2010,岩波書店,64ページ

〔産業財産権〕
○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
山　泰幸（YAMA YOSHIYUKI）
関西学院大学・人間福祉学部・教授
研究者番号：30388722
(2)研究分担者
浅井　秀子（ASAI HIDEKO）
鳥取大学・工学研究科・准教授
研究者番号：10331810
石田　和之（ISHIDA KAZUYUKI）
徳島大学・大学院ｿｼｵ・ｱｰﾂ・ｱﾝﾄﾞ・ｻｲｴﾝｽ研究部・准教授
研究者番号：30318844
船戸　修一（FUNATO SHUICHI）
静岡文化芸術大学・人文・社会学部・講師
研究者番号：00466814
(3)連携研究者
山中 茂樹（YAMANAKA SHIGEKI）
関西学院大学・災害復興制度研究所・教授
研究者番号：30411797
山地 久美子（YAMAJI KUMIKO）
関西学院大学・災害復興制度研究所・研究員
研究者番号：20441420
田並　尚恵（TANAMI HISAE）
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・准教授
研究者番号：90351957